

# 【ねがいましては】

令和6年8月23日

KYOWA SCHOOL

第414号

「こころ派」

ユニセフが2021年に発行した「先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」より、教育評論家の尾木直樹さんの提言がありましたのでご紹介いたします。

一今回の報告で注目すべきは、日本の子どもの「精神的幸福度」の低さです。その背景には、教育政策上の問題があると思います。日本では、15歳で迎える高校受験によって、子どもたちは偏差値という学力指標だけで振り分けられてしまします。競争原理に基づく一斉主義により序列化するわけですから、子どもの自己肯定感がガタガタになり、幸福感が育たないのは必然だと思います。また、頻繁にいじめに遭っている子どもは、明らかに精神的幸福度が低い結果が出てきます。子どもの7割がいじめの加害経験を、8割が被害経験を持っているとされる日本は、一刻も早く、最優先課題としていじめ問題に向き合い、構造的にも解決していく道を探る必要があります。どの国にも言えることですが、まず、子どもや若者へのメンタルヘルスのサービスの提供を真剣に考えなくてはなりません。精神的健康も健康の一部であり、身体的健康と同じくらい重要なことと考えることが大切です。(中略)子どもの自殺も日本の大きな問題です。日本では厚生労働省が2019年に公表した統計で、10~14歳の子どもの死因の第1位が初めて「自殺」になりました。さらに15~24歳の自殺率は先進国でワースト1です。—

尾木さんがはつきり述べていること・・・15歳で迎える高校受験が子どもの自己肯定感をガタガタにしてしまう。幸福感が育たないのは当然だ。その原因は競争原理にあります。これは中学受験にも言えることだと思います。

8月22日付の読売新聞、長谷川眞理子(自然人類学者)さんの記事より、『10歳前半の子どもの「幸福度」に影響を与えるのは母親との関係が大きく、その母親の幸福感は、子育てなどについて相談できる人が周囲に多いほど高い傾向があります。』と書いています。

子どもの幸福度のカギを握っているのはお母さん・・・そのお母さんが『しあわせ』でなければ子のしあわせにはつながらないと・・・。それにはまず、気軽に相談できる存在がいるかです。何事もひとりで抱え込んでしまうお母さん。核家族化が一気に進んでしまった社会・・・日本。三世代がともに暮らす家庭は少なくなってしまったようです。近所のおじさんやおばさんが「こらっ」なんて子を叱る光景もあまり見かけない・・・。

現代、かなりの割合でお母さんたちは通勤されているという現状があります。子と同じように、会社(学校)と自宅の往復です。そのような生活スタイルの中では、井戸端でたわいのない会話を楽しむなどという時間も必然的に少なくなります。そんなある日、子育てへの悩み事が発生したとしても、すぐさま気軽に話せる時間や人も・・・。そうなると現代は「スマートフォン」という情報で溢れる機材が活躍しそうです。しかし解決への即断はなかなかつかず、時間が過ぎるばかり、さらにモヤモヤ感は広がる・・・。最終的にはお母さまご自身が孤独感に苛まれる・・・。イライラ感は頂点に達し、やがてその感情は子へと向けられ・・・爆発・・・悪循環の始まりです。

その時、子はどのような状態になっているか。日々元気のない母の表情を見続ける子・・・。やさしい子ほど苦しんでいます。「ひょっとしたら、私(ぼく)のせいでお母さんが苦しんでいる・・・そうに違いない、私は(ぼく)は、悪い子だ・・・。」結論、共倒れ発生。となると、こころやさしいお子さんほど次のようない行動に移る可能性があります。「うそ」です。なるべく気づかれないようにしなければ・・・しかし時間の問題、やがて気づき始めるお母さん。二人の中に漂う違和感はさらに傷を深め、親子関係はますます悪化・・・。大切な『信頼』という二文字は根こそぎ奪われていく・・・。

長谷川さんは仰います。「母親が一手に子育てを担う現代は特異な状況で、『これが進化した人間の社会なのか』と考え込みます」と。長谷川さんは、「人間は『共同繁殖』『共同保育』の動物です」と、言いります。多くの動物を研究された結果「ひと」を客観的に捉えた結論だと思います。子育ては社会全体で責任を負うことが大切です。

現代では、受験(テスト)という競争原理が子の孤独感を呼び起こし、さらに母までがその競争の渦の中でもがき苦しんでしまう。子は他の子を「敵」とみなし、母も他の母を「敵」とみなしてしまいがちな社会・・・。

数字はうそをつかない反面、時として非情なものへと変化します。それが数値による差別です。指標にするにはとても便利な存在です。と同時に非情を生じやすい存在もあります。私は数字の持っている「楽(らく)」な部分を危険因子としてご理解いただきたいと思っています。それは、『数字は比べやすい』という「楽(らく)」です。人と人を比較する場合、数字はとても便利なツールになります。実社会でも極当然に使用されます。選挙結果やスポーツの結果など、とても便利なものです。それをいとも簡単に大人たちは、そして教育行政機関は、子どもの判断基準に取り入れました。私はそれを保護者の方々が子育てという「ひと」への成長過程に至極当然のこととして使用することは危険極まりないことだと思っています。ひとの基本は「おもいやること」です。自らの「やさしさ」をそっと隣にわたすことです。

子どもたちは日々の生活の中で、いつも思っています。お父さん、お母さんに褒められたい・・・。これをお読みいただいているお母さんお父さんはどちらでしょうか。数字派ですか、それとも『こころ派』ですか。